《研究ノート》　立正安国論に学ぶ

正法への帰依と仏国土の平和

〈第九問答・第十領解〉

研究主任　石川教張

〈広くもろもろの経をひらいて見れば、いずれも、もっぱら謗法の罪こそ重いと教えている。人が皆、正門の門から出て深く邪法の獄に入ってしまったことは、何と悲しいことではないか。悪い教えの網にかかって、永久に正法をそしる教えの網にからまれているとは、何と愚かなことではないか。正法を誹謗する深い霧のために道に迷い、地獄の燃える火焔に沈んでいることを、どうして燃えないでいられよう、苦しまずにおられよう。あなたは、早く信仰の寸心を改めて、速かに真実の教えである法華一乗の唯一の善に帰依されるがよい。その一善に帰依した眼から見れば、この苦しみと迷いにみちた世界はそのまま仏の国なのである。仏の国がどうして衰えることがあろう。十方はすべて輝く宝土なのである。宝土がどうして破壊されることがあろう。仏の国が衰微せず宝土が破壊されないならば、われわれの身は安全であり、心は平安となるのだ。この言葉こそ信じ崇めるべきである〉――。

この言葉は、いうまでもなく、『立正安国論』の眼目を語ったものである。ここでの主題は、第一に国土泰平・天下安

穏のためには謗法の妄執をひるがえして法華経に帰依すべき点を提示したところにあり、第二には仏の国土はけっして破壊されないという確信にもとずき、まさに破壊されつつある国土の安穏を実現することによって法華経信仰の正しさを証明していくことにある。それは、社会の破滅的危機と人間の不安と退廃を解決する信仰のあり方と国土にたいする信仰者あるいは歴史や社会に生きる人間のありように関する命題をあかしたものである。この命題にたいして日蓮聖人は、法華経信仰こそ現世の安穏を実現するものであり、現世を平安にさせる道理として法華経の正義としてのあかしをしるそうという信仰的立場を明らかにしたのである。

日蓮聖人が重視したのは、一人ひとりの個人的な「異の苦」を個別的な方法で解決するのではなく、社会に生きる人間が共通に受けている「同一の苦」をトータルに解決し国土の平和と個人の安全とを同時にしかも総体として保障する法華経信仰の姿を示すことであった。現実の苦しみをなくし、人間の心の迷妄や背信をとり除きえない「仏教」は、最早真の仏教とはいえないのであり、法華経信仰は永遠不朽の仏国土に生かされているという立場から汚染され破壊されようとしている現実の国土を浄め平安にさせる力をもつものでなければならない。この法華経の精神に社会ぜんたいを覚醒させ、人々を謗法の牢獄から解放させることによって不正・背信による破仏・破国の危機と不安を根源的に解決していくことこそ、正法を興隆させ法華経信仰を輝やかすことになる、というのが日蓮聖人の抱いた志想にほかならなかった。

日蓮聖人は、この立場から、鎌倉幕府の事実上の実権をにぎる前執権北条時頼を主対象とした時の権力者に謗法から法華経への「改心」をせまり、あわせて権力者と結託しながら「高僧」の顔の裏に邪悪・背信・偽善をふりまく宗教界・思想界を、仏教と国土を破壊する元凶とみなしその「権威」と真っ向から闘ったのである。「汝、信仰の寸心を改めて、実乗の一善に帰せよ」というばあいの「汝」とは、時頼一人のみをさすのではなく、そうした謗法の権力者とそれ

を陰であやつる宗教者・学者の謗法をさしている。日蓮聖人は、社会ぜんたいを破仏・破国に導いたものをいさめ、しかもその謗法のくい改めをすすめたのである。

日蓮聖人はまた、謗法の重罪におちこんでいる人々のぶつかっている現実の苦悩をも見つめつづけ、謗法の罪苦を心の痛みとすることによって、人間の妄執を転換させ蘇生させることによって法華経信仰に導き入れ、苦しみに沈む民衆をぜんたいとして救済しようとした。この法華経の仏国宝土に生かされている〈妙の世界〉に参入することによってこそ、仏国土に生かされている恩に報じ、不正を正義にかえ、邪悪をやめて善をめざし国土の安穏もなしとげられるというのである。

日蓮聖人はいう。国土泰平・天下泰平はすべての人々の願いである。しかし、その平和はまさに破壊されようとしている。何よりも謗法によって自界叛逆難（内乱）と他国侵逼難（侵略）の二難という亡国の破滅的危機が眼前に予測されており、こうした国内と国際的な危機状況に「情慮」をめぐらし、まず内なる邪悪と背信を対治せねばならない。外なる社会の危機は、内なる人間精神の腐敗によっておこるのであり、内なる腐敗は外なる危機を現出させるのである。平和と正義の心をなくし正法を信ずる志を喪失することが、仏教を破壊し国土を破滅に導く根源なのである。しかし、それは一人ひとりが思い思いに自己の保身や平安を思ってこと足りるほどなまぬるいものではない。一人ひとりの平安は社会ぜんたいの平和なしにはありえない。「一身の安堵を思はば、先づ四表の静謐を祈るべきか」。宮沢賢治が〈世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない〉といったのは、このことである。

さらにまた、この現世を安穏にできない仏教ならば死後の救いが保障されるどうか疑問となるであろうし、死後を恐れるがゆえに謗法を尊ぶのは現世の安穏を実現する努力を放棄し、現世における地獄の罪苦に沈没しつづけるいとなみにすぎない。その邪説の妄執をうちかえして「正法の門」に帰れ、法華経の唯一の善に帰せよ、迷妄の世界が仏の国

土である以上、仏の国土を輝く宝土への浄め、汚染された人間精神の妄執を清浄にさせてゆかねばならぬ。仏の国土からそそぐ光明によって、世間と人間の闇をとり除け。日蓮聖人は、ここに法華経のもつ「信心の力」を確信し実証しようとしたのである。「然れば則ち三界は皆仏国也、仏国其れ哀へん哉。十方は悉く宝土也、宝土何ぞ壊れん哉」ということばは、この法華経における「信心の力」によって確信づけられた〈聖なる仏国土〉の永遠性にたいする宣言である。それは、〈釈迦仏および三世十方の諸仏のすむ仏国宝土はいかなることがあっても衰微することはない〉〈仏国土に生かされているわたしとわたしの中の仏国土は破壊されない〉という「信仰の寸心」であった。その信仰の寸心を「信仰の力」としていかすことが、立正によって安国をなしとげ、安国をめざすことによって立正を実現する実践にほかならなかったのである。日蓮聖人を燃え上らせ、ふるい立たせたのも、じつは「仏陀の諫暁」であり、この法華経のもつ「信仰の力」であったにちがいない。「これ偏へに日蓮の力に非ず。法華経の真文の、感応の至す所か」(安国論奥書)とは、この意味をさすのではあるまいか。

ところで、仏国土とはこの娑婆世界をつつむ釈迦仏の浄土のことであり、したがってこの世界とその中の日本も例外ではない。「この国は釈迦如来の御所領」(法門可被申様之事)「この世界はわれらの本師釈迦如来の御所領」「この娑婆世界は釈迦如来のご進退の国土」(釈迦御所領御書)と日蓮聖人はのべている。また次のようにも語っている。「この娑婆世界は、はるか昔よりこのかた、教主釈尊のご所領である。大地も、空も山と海も草木も、ほん少しのものさえ釈尊以外の他の仏のものではない。また一切衆生はみな釈尊の子である」(一谷入道御書)。「法華経を修行する者の住む所を浄土と思うべきあって、どうして煩わしく他処を求める必要があろう」(守護国家論)。

法華経信仰とは、この永遠不壊の教主釈尊のご所領に釈尊と共に生き、釈迦仏に生かされている釈尊の子として釈尊の国土を破壊から守りぬくことである。釈尊の国土はつねにくずれぬ平和の宝土であるという確信にたって、国土と人

間を破壊と罪苦から救う「信心の力」を証明することであり、罪苦に没在する人間と破滅にひんする社会の濁乱を浄めその闇をとり去る信仰の光明を広く深くそそぎこむことにある。法華経への信の一念によって、現世の安穏を実現し娑婆世界が釈尊の浄土であることを眼前に身証することこそ、法華経の信仰といえるのである。

これは、申すまでもなく、法華経の説く「三界は安きことなし、なお火宅の如し、衆苦充満してはなただ怖畏すべし、かくの如きらの火熾然としてやまず、如来はすでに三界の火宅を離れて寂然として閑居し林野に安処せり、今この三界は皆これ我が有なり、その中の衆生はみなこれ吾が子なり、しかも今この処は諸の患難多し、唯我一人のみよく救護をなす」(譬喩品)、「我この土は安穏にして天人常に充満せり」(寿量品)などの教説に導かれたものであった。

日蓮聖人は、永遠にして破壊されぬ仏国土の世界に身をおく立場から、この娑婆世界がいかに苦しみに充ちていようとも、その罪苦を心の痛みとし法華経の一善へと心を改める精神の変革と覚醒とによって仏国土につつまれていることをあかし、そのゆえに仏国土としての清浄さと光輝さとをこの娑婆世界がもたねばならないことを説き示したのである。それは当然、仏国土を汚し暗い濁世にしてしまっているもの、聖なる国土を魔的な地獄の国に変節させてしまったものを明らかにし、その原因である謗法という思想的、精神的腐敗の根をたって、仏国土としての姿に清浄化してゆく行動につながっていったのである。日蓮聖人は、これらの「信仰の寸心」と「信仰の力」をたんに教義や観念としてではなく、じっさいの時代状況ときり結びながら実態化しようとしたわけであり、この意味では、法華経信仰に生かされた人間という自覚と共に、歴史と時代に生きる人間のありようとは何かと考え、その思想と行動を追求する立場にたたない限り、『立正安国論』を自己にひきつけてとらえることはできないだろう。これは、個人の内なる安全に閉じこもる利己的な個人主義を否定し、社会ぜんたいの平和を求めることによって個人の平和も獲得されうるということであり、来世をまず考えるのではなく現世を安穏にするという法華経信仰と歴史創造を一体とする観点を必須としているからであ

る。

しかも、この第九問答をはじめ『立正安国論』ぜんたいに流れている精神は、歴史および時代状況と格闘しながら、「娑婆即寂光土」の理想を成就し、それを歴史のうちに具体化することが「立正安国」の諫暁と誓願であるという日蓮聖人の普遍的で同時に歴史的・具体的な信仰精神にほかならない。「三界則仏国」ということばは、娑婆即寂光土の思想を現わしたものであろう。

娑婆即寂光土とは、仏の眼から観れば、この苦悩と迷妄の火宅のごとき世界はそのまま寂光土であるという意味である。これはあくまで仏眼から観てのことであって、この前提がなければ娑婆世界の現実を弁護し合理化することにならざるをえない。問題は「即」の字にある。「即」の字は、娑婆世界を離れて寂光土はなく、寂光土はこの娑婆世界にあるという相即不離の連関を根本としている。この両者は一体化した同時存在なのであって、現世と来世、娑婆と仏国土とを切離す二元論的な立場を意味するものではない。この娑婆世界を寂光土化し、寂光土としての娑婆世界を守り通すという姿勢は、こうした娑婆世界と寂光土とを一体とみなす思想からうまれたものである。しかも「即」とは、娑婆世界の現実直視という即事性にもとずき、それを通して世間と人間の罪苦を生の痛みとすることによって心を改め、精神の転換と覚醒をへて寂光土に生かされていることを認識し、娑婆世界を寂光土に蘇生・開発させて妙の世界を顕現する信の力を意味している。そこには、世間と人間国土とを一瞬にしてそのままに救済するという即身成仏の「即」もふくまれている。

日蓮聖人が、「三界則仏国」とのべたことは、こうした娑婆即寂光土の理想を語ったものであり、社会と人間の蘇生、仏国土の不朽性にたいする覚醒、娑婆世界の仏国土にむけての「信心の力」を「則」（即）ということばで示したものと思われる。この意味からいえば、立正即安国であり、立邪亡国の転換とそこからの蘇生という〈妙〉による信心の

力こそ立正安国の四文字に一体となって結晶された精神といえるであろう。これは、いうまでもなく立正（仏法）と安国（王法）を二元対立の存在とみなし、この両者の冥合をはかる考えを示すものではない。もしそうなら、それは古代の貴族社会で主張された王仏双翼論・両輪論の焼なおしにすぎない。立正即安国とは、立正のなかに安国があり安国のうちに立正がなければならないということである。したがって、立正のない安国は「安国」とはいえないし、安国のない立正は「立正」とはいえないのである。立正は安国の原動力となり、安国は立正を成就する実践のあかしなのである。

こんにち、私たちは〈立正安国〉の旗をかかげて世界を仏国土に浄め、人間の心を背信謗法から覚醒・蘇生させてゆく道をあらたに追求すべき時にいる。仏国土はけっして破壊されないという確信を強め、その故にこの国土を破滅から救わねばならない。それは、まず私たちが「信仰の寸心」を改め法華経の唯一の善に帰依し、その「信心の力」をもって社会の平和と個人の安全を実現する行動をおこすことであろう。核戦争の危機、自然の破壊、人間精神の荒廃そして釈迦仏に背くが故の悲惨さが充満している濁乱の世間と人間の心の闇に光明をそそぎ、仏国土としての現世の安穏と平和を確立するために励まねばならない。

〈仏の言葉をうけたまわり、正法を誹謗する罪科がいかに重く、法を破る罪がどんなに深いかがよくわかった。これからは、いよいよあなたの慈誨を仰ぎ、ますます自分の愚かな心を反省し、速かに謗法の罪を対治して、早く世の平和を実現し、まず生きている現在を平安にしたのち、さらに死後に救われるようにしたい。これは、わたしが信ずるだけでなく、他の人々の誤りを誡めていきたいと思う〉。

この第十領解のことばは、主人の説諭をうけた客が、正法に帰依して謗法の罪の深さを痛感し、仏語に導かれ日蓮聖

人の慈訓にしたがって謗法の対治と現世における平和の実現を誓ったものである。謗法の重罪を生の痛みとし、自ら謗法の心をうちかえして正法に随順していく覚悟が示され、同時にその重罪をおかしている人々の心を改めさせ唯一の善に帰依させることによって「泰平」の成就にとりくむ決意表明がなされている。「先づ生前を安んじ、更に没後を扶けん」という立正安国の行動宣言は、現世の平安なしに死後の救いもありえないという思想に裏付けられたものである。それは、釈尊と釈尊の仏国宝土を此上に復活再生させ、その国土を汚染腐敗させている謗法の対治を通して仏国土としての絶対永遠の平和を確立させるために、自分も立上り他者に向って謗法の重罪の消滅から正法への帰依へ、正法帰依から現世における平和と人間の平安の確立へと実践していく道が提示されている。

二十世紀の日本(世界をもふくめて)、モノの豊かさに反比例して心の貧しさと精神の退廃はますます増大しており、生命と生活の不安や危機はいよいよ深刻化している。憎悪・争闘・疎外・差別・利権・不正・邪悪・不信・エゴイズム、ありとあらゆる社会と人間の腐敗は、正義と平和と人権をふみにじっている。それは、仏なき悲惨さ、正法に背くがゆえの罪苦と迷妄を根源としており、それはこの世間と人と人の間に充満している。核戦争の危機はすでに限定戦争の領域をこえて、いっぺんに人間ぜんたいと世界そのものを破滅させる脅威をもっており、自然の破壊、人間生活の破壊はとどまることをしらない。軍備の増強にたいして福祉の切捨てがなされ、金権絶対の風潮のなかで人権は喪失されている。教育の荒廃をはじめ冷くよそよそしい人間関係のなかで、人はみな「一身の安堵」のみを考えている。現代は不信の時代である。いやむしろ「背信の末世」といえる。背信を対治し正義をつらぬき、平和と幸福と生命を尊重する〈光明と清浄〉への道を開拓する「生前を安んじ」ていく実践にとりくまねばならない。それは、現実から逃避する悲観主義や個人の内なる心に閉じこもる利己主義によっては解決できない。正義を破壊する権力者とそれをささえる思想界や武力の世界との闘いとそれにたいする諫めに肉迫しなければならず、同時に自分をふくめた人間の背信謗法にたいする信仰

的な格闘と罪苦を対治する精神の戦いを現世および人と人の間に展開してゆかねばならない。

謗法を対治し、その重罪を痛みとせよ。

背信を改めて仏の正義に帰依せよ。

正法をうち立て世界の平和をなしとげよ。

社会の安穏を願い仏国土を浄めよ。

仏国土は破壊されることはない。破壊されない永遠の仏国土であることを、安国の実践によって証明せよ。

釈尊の慈悲に導かれ、正法に帰依し、日蓮聖人の慈訓にしたがって、信仰の寸心を改め、世間のくらやみを除いて光明に輝く仏国宝土を現世にあらわし、人間の心を浄めて汚染された国土を清浄にせよ、法華経の正義をこの世にしるしとどめよ。

〈日〉と〈蓮〉、〈光明と清浄〉を一体同時に実践していく法華経の信仰行動の宣言とテーゼ、それが立正安国なのである。